

頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを活用した論文

1. p16 陽性中咽頭扁平上皮癌の治療戦略の最適化

Saito, Y., et al. (2020). "Optimization of therapeutic strategy for p16-positive oropharyngeal squamous cell carcinoma: Multi-institutional observational study based on the national Head and Neck Cancer Registry of Japan."

Cancer 126(18): 4177-4187.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを用いて、p16 陽性のヒトパピローマウイルス (HPV) 関連中咽頭扁平上皮癌の最適な治療戦略を分析したものです。2011 年から 2014 年に治療を受けた患者 688 人のデータを基に検討されました。結果として、T1-T2N0 の患者は放射線療法単独でも化学放射線療法 (CCRT) と同じ生存率を示しました。また、ステージ I-II の患者では、高用量シスプラチン (160 mg/m²以上) を用いた CCRT が、低用量の治療よりも生存率が高いことが分かりました。この研究は、患者の負担を軽減しながら効果的な治療を選択するための重要な知見を提供しています。

2. 中咽頭・下咽頭・声門上扁平上皮癌に対する経口ロボット手術と非ロボット手術の治療成績

Sano, D., et al. (2021). "Treatment outcomes of transoral robotic and non-robotic surgeries to treat oropharyngeal, hypopharyngeal, and supraglottic squamous cell carcinoma: A multi-center retrospective observational study in Japan."

Auris Nasus Larynx 48(3): 502-510.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを用いて、中咽頭・下咽頭・声門上部の扁平上皮癌に対する経口ロボット手術 (TORS) と非ロボット手術の治療成績を比較したものです。分析の結果、TORS を受けた患者は、非ロボット手術を受けた患者よりも病変の残存率

(切除断端陽性)が少ないことが分かりました。また、TORS を受けた患者は術後の追加治療を必要とする割合も低い傾向がありました。特に中咽頭癌の患者では、TORS を受けることで手術後の病変残存率が低下し、追加治療を回避できる可能性が示されました。この研究は、TORS が非ロボット手術よりも有利な選択肢となる可能性を示唆しており、今後の治療指針に役立つ重要な知見を提供しています。

3. T3-T4N0 喉頭癌に対する選択的頸部郭清

Saito, Y., et al. (2023). "Elective neck dissection for T3-T4N0 laryngeal carcinoma: evidence from Japan's National Head and Neck Cancer Registry."

Int J Clin Oncol 28(2): 209-220.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを用いて、進行した喉頭癌（T3-T4N0）の手術における選択的頸部郭清（END）の意義を検討したものです。2011 年から 2018 年に治療を受けた 1,218 人の患者のデータを分析しました。結果として、80 歳以上の高齢者では END が省略される傾向がありましたが、リンパ節転移の発生率は年齢による大きな差はありませんでした。また、生存率や再発率に関して、END を行うかどうかは決定的な影響を与えないことが示されました。高齢者では END を省略して手術時間を短縮することが考慮されるべきであるという重要な知見が得られました。

4. 若年成人と高齢成人の舌扁平上皮癌における生存率の比較

Omura, G., et al. (2023). "Comparison of survival outcomes between adolescent and young adults and older adults with tongue squamous cell carcinoma: a nationwide database study using the head and neck cancer registry of Japan."

Int J Clin Oncol 28(2): 221-228.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを用いて、若年層（AYA 世代）の舌扁平上皮癌患者の予後を、高齢者と比較したものです。2011 年から 2014 年に診断された 2221 人の患者のデータを分析した結果、AYA 世代の患者は高齢者よりも生存率が高いことが分かりました。また、AYA 世代では女性の割合が高い傾向がありました。特に、疾患特異的生存率と全生存率の両方が AYA 世代で有意に高かったことが確認されました。この研究は、若年患者の予後についての不安を軽減し、治療選択の参考となる貴重な情報を提供しています。

5. 日本における上咽頭癌に対する根治的放射線療法

Koide, Y., et al. (2024). "Definitive radiotherapy for nasopharyngeal carcinoma in Japan: analysis of cases in the National Head and Neck Cancer Registry from 2011 to 2014."

Jpn J Clin Oncol 54(1): 54-61.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを用いて、上咽頭癌の患者が放射線療法を受けた場合の予後を分析したものです。2011 年から 2014 年に診断された 741 人の患者のうち、457 人が研究対象となりました。調査の結果、5 年間の生存率は全体で約 72%、病期によって異なり、ステージ I では最も高く約 83%、ステージ IVA では約 51%でした。また、病気が進行せずに生存できた割合（無増悪生存率）は約 58%でした。この全国規模の調査により、上咽頭癌の放射線治療の成果が良好であることが示され、今後の治療指針の基礎となる貴重なデータが得られました。

6. 高齢者の局所進行頭頸部癌に対する化学療法併用または単独の放射線療法

Yasuda, K., et al. (2024). "Radiotherapy with or without chemotherapy for locally advanced head and neck cancer in elderly patients: analysis of the Head and Neck Cancer Registry of Japan."

Int J Clin Oncol 29(3): 241-247.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録のデータを用いて、高齢者の頭頸部癌に対する放射線療法と化学放射線療法（CRT）の有効性を比較したものです。分析の結果、75 歳以上の患者では、CRT を受けた方が全生存率が高いことが分かりましたが、病気の進行を防ぐ割合（無増悪生存率）には大きな差はありませんでした。また、高齢者では CRT の追加効果が限定的であり、その有効性には不確実性が残ることが示されました。このため、今後さらなる研究が必要であり、高齢者の治療選択について慎重に検討することが重要だと考えられます。

7. T2N0 声門扁平上皮癌患者に対する経口抗がん剤併用放射線療法の臨床的利点

Ichisaka, T., et al. (2024). "Clinical benefits of combining oral cytotoxic chemotherapeutic agents with radiotherapy in patients with T2N0 glottic squamous cell carcinoma based on the reports of the Head and Neck Cancer Registry of Japan." Oral Oncol 157: 106942.

<概要>

この研究は、早期の声門癌（T2N0）の治療において、放射線療法（RT）と化学放射線療法（CRT）の効果を比較したものです。特に、経口抗がん剤を使った CRT が RT 単独よりも局所制御率や無増悪生存率を改善することが分かりました。また、点滴による CRT も RT に比べて無増悪生存率を向上させました。これは、喉頭を温存しながら病気をより効果的に治療できる可能性を示しています。将来的に、経口抗がん剤を活用した治療法がさらに研究されるべきであると結論づけられました。

8. T4aM0 下咽頭扁平上皮癌に対する咽頭喉頭全摘出術の生存率の優位性

Omura, G., et al. (2024). "Survival Outcome Superiority of Total Pharyngolaryngectomy Compared with Chemoradiotherapy for T4aM0 Hypopharyngeal Squamous Cell Carcinoma: A Nationwide Database Study of Japan."

Ann Surg Oncol 31(12): 8206-8213.

<概要>

この研究は、進行した下咽頭扁平上皮癌(T4aM0)の患者において、咽頭喉頭全摘出術(TPL)と化学放射線療法(CRT)のどちらが生存率を高めるかを全国規模のデータを用いて分析したものです。2011年から2015年に診断された患者のデータを解析した結果、手術(TPL)を受けた患者は、CRTを受けた患者よりも疾患特異的生存率および全生存率が有意に高いことが分かりました。これにより、T4aM0の下咽頭癌の治療において、手術がより良い予後をもたらす可能性があることが示されました。

9. 頭頸部肉腫の組織型別での治療成績

Kobayashi, K., et al. (2025). "Histological Type-Specific Behavior in Sarcomas: Analysis of Head and Neck Cancer Registry of Japan."

Laryngoscope In press.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録を活用して、頭頸部肉腫の疫学や臨床的特徴、治療成績を分析したものです。最も多い組織型は横紋筋肉腫、骨肉腫、軟骨肉腫、平滑筋肉腫、脂肪肉腫であり、主な発生部位は鼻腔や副鼻腔でした。特に、横紋筋肉腫と血管肉腫は頸部リンパ節への転移リスクが高いことが分かりました。全体の3年生存率は約75%でしたが、未分化多形肉腫や平滑筋肉腫などの一部の組織型では生存率が低く、局所制御が困難であることが示されました。この研究は、頭頸部肉腫の治療方針の確立に役立つ重要な知見を提供しています。

10. 日本の頭頸部悪性腫瘍全国登録

Kawakita, D., et al. (2025). "Head and neck cancer registry of Japan."

Auris Nasus Larynx 52(2): 122-126.

<概要>

この研究は、頭頸部悪性腫瘍全国登録の概要についてまとめたものです。2012年に登録方法の見直しを行い、未治療で確定診断された頭頸部の悪性腫瘍患者の情報を収集しています。登録対象は口腔、喉頭、下咽頭、中咽頭、上咽頭、鼻腔、副鼻腔、大唾液腺、原発不明癌の頸部リンパ節転移など幅広い領域に及びます。2024年6月時点で15万人以上の患者が登録されており、そのデータをもとに重要な研究成果が発表されています。この全国規模の登録システムは、頭頸部癌の疫学や治療戦略の理解を深めるのに貢献していると考えられます。

11. 進行下咽頭扁平上皮癌患者の化学放射線療法および咽頭喉頭全摘出術の生存率

Horichi, Y., et al. (2025). "Survival Outcomes of the Patients With Advanced Hypopharyngeal Squamous Cell Carcinoma Treated With Chemoradiotherapy and Total Pharyngolaryngectomy Based on Reports of Head and Neck Cancer Registry of Japan."

Head Neck In press.

<概要>

この研究は、進行した下咽頭癌の治療法について、手術（咽頭喉頭全摘出術）と化学放射線療法（CRT）を比較したものです。分析の結果、T4aの患者では、導入化学療法（ICT）を先に行うことで生存率や局所再発のリスクが改善されることが分かりました。一方で、CRTと手術（TPL）を比較すると、どちらも生存率に大きな差はありませんでした。このことから、ICTやCRTが進行した下咽頭癌の有効な治療選択肢になる可能性があるという示唆されています。つまり、手術をしなくても生存率が保たれる治療方法があるかもしれないという重要な研究です。